

宝物不登場という趣向の利用

——『諸道聴耳世間狙』一之卷三と演劇作品『大職冠』を中心に——

王
欣

はじめに

明和元年（二七六四）十一月に、上田秋成作品『諸道聴耳世間狙』（以下、『世間狙』と略称する）の開板願書^①が出版され、明和三年（二七六六）正月に、〈和訳太郎〉の署名のもと、『世間狙』^②が出版された。

『世間狙』一之卷三「文旨は昔づくりの家蔵」では、大坂北浜の大豆腐七郎右衛門は、若い時から商売に無関心で、書画骨董の目利き自慢をしていたが、贋物をつかまされ、ついには目違い先生と渾名され、父親に意見されても、「七郎右衛門跡を見おくり手鼓の中音にて。ウツイやしき海士の胎内にやどりてと。諷はれしはいかるたわけの」と謡まじりて平然としている。従来、息子である七郎右衛門の人物像と『鎌倉諸芸袖日記』巻四の一「浄瑠璃物真似も年功

のいひ立」、巻四の三「細工の上手自慢を謂ひ勝ちの座敷」、及び『世間息子氣質』巻四の二「末子が知恵は上々箱入の銀持形氣」、卷三の二「世間の人に鼻毛を読まる、歌人の形氣」との関連性が指摘された。^③また、『世間狙』一之卷三最後の文「いやしき海士の胎内にやどりて」を謡曲「海士」と関連付けた。^④さらに、七郎右衛門の悔しまぎれに「いやしき海士の胎内にやどりて」とつぶやく場面を当時の複数の脚本と対照し、「いやしき海士」が用いられる同様のくだりがあることを指摘した論述もある。^⑤一方、『世間狙』一之卷三に含まれている演劇的な要素、挿絵などから、『世間狙』一之卷三の「此紋はまへかどに海老蔵が来た時見ました」という設定と歌舞伎「八的勢曾我」、二代目團十郎との関連性を考察した論考も見られる。^⑥

これまでの研究の中では、『世間狙』一之卷三と謡曲「海士」^⑦と

の関連性が指摘された。しかし、謡曲「海士」では、海士は本物の宝珠「面向不背の玉」を取ったが、『世間狙』一之卷三の七郎右衛門は贋物の曙の茶器を買った。つまり、物語の展開と深く関わっている宝物の真偽において、両者は完全に違う。『世間狙』一之卷三の展開の上で謡曲「海士」と共通する要素がないのに、なぜここで唐突に謡曲「海士」が語られるかを再検討する必要があると思われる。

周知のように、謡曲「海士」は大織冠鎌足を主人公とする幸若舞曲「大織冠」とは同工である。^⑤ 川口節子の指摘によると、「近世に至り、浄瑠璃や歌舞伎の、いわゆる『大織冠の世界の玉取り劇』は、より謡曲『海人』に重点を置く形で、多様な作品群を形成した。(中略)水晶に釈迦の尊像や仏舍利を込めた面向不背の玉を、海人が子のために獲得し、それが王権を保証したり、仏法真髓への到達に機能するという、前時代の寓話の域を出るものではなかった。^⑥」

つまり、近世に至るまでの「大織冠物」では、玉が王権獲得とその保証の寓意を担い、具体的な形態で現れていたと考えられる。ところが、近松門左衛門の『大織冠』は特別で、従来の「大織冠物」と違い、「玉のない玉取り」として日本と唐の為政者の知恵比べを描くものである。^⑦ よって、物語の展開と深く関わっている本物の宝物が登場しないという設定において、『世間狙』一之卷三は近松門左

衛門の『大織冠』^⑧と似通っている。管見の限り『世間狙』一之卷三の道具会の部分と近松門左衛門の『大織冠』の玉取りの部分との関連性については、未だ考察が行われていない。

また、森山重雄の『上田秋成初期浮世草子評釈』の評釈では、『世間狙』一之卷三の中の「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」が秋成の体験を踏まえていると指摘した。^⑨ 確かに、『胆大小心録』から秋成が朝鮮使節と二度会ったことが分かる。しかし、『世間狙』一之卷三では、物語の展開とあまり関わっていない「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」という内容を取り入れた目的は秋成自身の経験を物語に入れることだけなのか。「朝鮮人を三度見た」という内容は『世間狙』一之卷三の物語の展開とどのような関わりを持っているのかというような疑問が依然として残されている。

さらに、神楽岡幼子は「諸道聴耳世間狙」の挿絵の中で、『世間狙』一之卷三の「此紋はまへかどに海老蔵が来た時見ました。曾我兄弟の紋所かと存ます」という設定、およびその挿絵に描かれた人物の着物に見られる三柙の紋から、『世間狙』一之卷三の挿絵と海老蔵が登場した歌舞伎「八的勢曾我」との関連性を指摘した。^⑩ しかし、『世間狙』一之卷三の挿絵には、三柙の紋の着物を着た男のほか、若者一人と僧侶一人も描かれている。この挿絵に描かれた若

者と僧侶の人物像は、『世間狙』一之卷三の朱鞘を見分ける場面の刀屋と合わない。しかも、これまでの研究の中では、『世間狙』一之卷三の挿絵に描かれた若者と僧侶に触れた研究はなかった。それ故、『世間狙』一之卷三の挿絵に描かれた三人は何をイメージしているのかを究明する必要があると考えられる。

そこで、本論文では、結末の部分で「いやしき海士の胎内にやどりて」という内容が設定された『世間狙』一之卷三と近松門左衛門の『大職冠』との関連性を明確にすることを試みる。さらに、『世間狙』一之卷三の「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」という設定、及びその挿絵の役割も明らかにしたい。

一、道具会と玉取り

『世間狙』一之卷三の後半部分では、道具会に参加した七郎右衛門は、六十余りの老人が売ろうとする名物茶器を見たことがないのに、金八十両という高値を付けた。老人が出した「室町殿の御重宝曙といふ茶器」を見た時、七郎右衛門は「めつたにしほらしく見へ」と思ったが、本当の感想を言わずにしきりにそれを褒め、老人が七郎右衛門の目利きを誉めた後、道具会はお開きとなる。その噂は上方中に知れ渡るが、そのことが本物の曙の茶器の持ち主の耳に入り、七郎右衛門の買った曙の茶器が贋物だと分かる。七郎右

衛門は目利きが違った「目ちがひ先生」と呼ばれるようになり、さらに、父親にも意見された。しかし、当の本人は「七郎右衛門跡を見おくり手鼓の中音にて。ウッ、いやしき海士の胎内にやどりてと。諷はれしはいかゝるたわけの」と謡まじりで平然としている。

従来、目利き自慢の七郎右衛門の人物像と『鎌倉諸芸袖日記』巻四の一、巻四の三、及び『世間息子気質』巻四の二、巻三の一との類似性が指摘された。また、「ウッ、いやしき海士の胎内にやどりて」という内容から、『世間狙』一之卷三が謡曲「海士」と関連付けられている。しかし、それらの作品の中では、『世間狙』一之卷三の道具会の展開と深く関わる「本物の宝物の不登場」という設定が見られない。そのため、『世間狙』一之卷三とそれらの作品との関連性が薄いと言えよう。

一方、謡曲「海士」と緊密に関わっている「大織冠物」の中では、「玉のない玉取り」が設定された作品として、正徳元年（一七一二）十月前後竹本座で上演された近松門左衛門の『大職冠』が特別な存在として挙げられる。

さて、『世間狙』一之卷三の道具会は、近松門左衛門の『大職冠』の玉取りとどのような関連性を持っているのだろうか。本文における両者の対応関係をまとめると、次のようになる。

場面①

とかく道具屋でしれぬ物は此先生へ持て来て。目利して買てもらふとは商人の軍法。大豆屋の城を売おとさんとぞ謀りける。

（『世間狙』一之卷三）

帝はるかに御覧有此たび日本大職冠に。婚礼の聘物花原磐泗浜石。面向不背の玉汝に持せ遣すべし。然るに此玉は仏法の深理にて。誠の玉の体有共なし共。終に箱の中拜したる者なし。日本の万民疑ひの心なく。仏法繁昌唐土の恥辱なき様に。はからふべしやとの給へば万戸謹て承り。 （『大職冠』第二）

場面①において、『世間狙』一之卷三の道具屋も、『大職冠』の万戸も目的を持って出かける。『世間狙』一之卷三の道具屋は七郎右衛門に骨董買いに大金を使ってもらいたい。『大職冠』の万戸は唐土に恥をかけずに日本で仏法を繁昌させようとする。

場面②

ある時伏見町加賀屋何某が方にて道具会ありて。諸方の腹ふくれども打寄て倦た道具は持て出。珍らしき物をとか、りける。

永徳の三幅対。徳乗が縁かしら。きぬたの水指。滝本の自画賛。浅黄印金が一尺四方。高麗茶碗。楊貴妃の天冠。定家卿の鼻鏝。法然上人の尿瓶まで。それ／＼にせりわけて市大きにはづみけ

り。

（『世間狙』一之卷三）

唐人の行列唐人の行れつ。つうじ詞の次第。進物みやげたから物の次第。つぶさにしるし上下は六錢一さつで。三錢ばん里のあなた迄つぶさにしれる。唐人の行列とよみ立てこそうりにけれ。今度唐のみかどより大職冠鎌足公への御進上。花原磐泗浜石面向不背の玉。象一疋虎豹二疋。花の咲根つきの伽羅五本。実のなる枝さんごじゆ十本小人島の夫婦。せいは六寸からし、の毛ぶとん卅枚。赤梅檀の水風呂桶めい／＼鳥のひよこ。孔子の自筆の論語大学。一里四方の毛氈百枚五色の水ざたう千斤。じゃかうの猫夢くひ獲。尋陽の江の生狸々二疋。但内一疋は下戸にてくるみ餅を飼がひとす。其外八疊敷の落鷹二箱。八尺まはりのこんへいたう一折。麒麟のかす漬うす塩の人魚。龍門の生鯉迄日本の姫君の。御出世いはふ進物なりとよみ立れば。往來の貴賤珍しがり皆々へかふてぞ通りける。 （『大職冠』第二）

場面②において、『世間狙』一之卷三の道具会でも、『大職冠』の唐使来朝でも様々な宝物が出されている。『世間狙』一之卷三の道具会で様々な骨董が出された。『大職冠』の唐使来朝の時でも数多くの贈り物が出されている。

場面③

かゝる中に六十有余の老人山繭袖の服太に鼠小紋の羽織も綿のおちつきし人柄。私もちと払ひたい物がござると二重切の花活に朱霽器一ツ出されければ。いづれも見て廻し。まづ花いけは銀五両におさまり。茶器は銀式両よりせりけるに。いや／＼それはあまりなりと引こめらるれば。段々せり上て金百疋につければ。なんと御隠居もふよい直段でござりますが。お放しなされませぬかと問へば。いや／＼お目に入ねば是非なし。手前了簡とは大分相違いたすと取あへねば。はてなあ見た所がさして名物とも見へず。少／＼なれも見ゆればよい払ひ直段であらふにといへど。たゞ黙然と返事せられず。

『世間狙』一之巻三

婚礼の聘物花原磬泗浜石。面向不背の玉汝に持せ遣すべし。

(中略) 二つの宝に相そへ。面向不背の玉の箱をもつてかの土に渡り。

『大職冠』第二

程なく唐船讚州志戸のうらに着。宝の玉を龍神にうば、れ万戸は日本へもわたられず。唐土へも帰られず今をいてかの浦に逗留と。西国四国是ざたと語りもあへぬに有風大きに悦び。扱はうたがひなき実説入鹿を亡す時節到来。 (『大職冠』第二) 則風聞もあへず玉とることは不定成共。一命を奉るはいとやす

宝物不登場という趣向の利用

し。夫婦は一身殊に胎内に。我らが種を懐妊の身。重々ふだいの主君龍宮の道こそ存ぜず共。千尋万尋はおろかならく／＼。金輪際迄わけ入て命をすてよと申さんに。 (『大職冠』第三)

場面③では、『世間狙』一之巻三の道具会に参加する老人も、『大職冠』の万戸も最初は、二つの宝物を出した。老人は花活と朱霽器を出品し、万戸は聘物としての花原磬と泗浜石を渡した。また、両作において、見たことのない宝物に対する期待がますます高まり、どのような代償を払つても宝物を見たいと思う人々の気持ちを描かれている。ただし、『世間狙』一之巻三での代償はお金であるが、『大職冠』での代償は命である。

場面④

大豆屋七郎右衛門床脇よりはるかに。御隠居御道具今一度御見せなされと。道具屋に取つがせ暫くながめ入て。是はちと存じよりもあれば私が申請ませう。御不足ながら金子八十両にまけて下されまいかといへば。其時老人手を打てさても／＼こなた様はお若い。道具をお好なさる、と見へて天晴のお目利。八十両では売損がまいれど斯ならんでござる道具や衆も。金百疋相応と仰られた物を。飛で大金にお付なさる、は。此道具の素性御覧なされての事なればまけて進ませせうといはる、に。

『世間狙』一之卷三

鎌足公。嬉し、本望たり然らば日限をさだめ。万戸が舟へもあん内し国中にも披露し。諸人の前にて鎌足が玉を二たび取りと。もろこし迄もしらすべし去ながら。(中略)

すでに其日も。極りて唐船にあん内有。万戸も船をうかふれば志戸寺の諸僧楼船をかざり。

『大職冠』第三

場面④では、『世間狙』一之卷三の七郎右衛門も、『大職冠』の鎌足も自ら宝物を自分のものにしてしようとする。また、『世間狙』一之卷三の老人も、『大職冠』の万戸も相手の願望に応じた。ただし、七郎右衛門と老人とのやり取りは茶器の売買だが、鎌足と万戸とのやり取りは面向不背の玉を取り戻すことである。

場面⑤

一座大きに興をさまし是はどうした名物とあいた口ふさがねば。七郎右衛門したり顔にていかさま千両道具を小金にまけて下さる、は甚だ身にとつて大慶にこそござれ。連城の壁も見れるものがござらいでは瓦礫も同前。これは室町殿の御重宝曙といふ茶器でござりますかと存る。

『世間狙』一之卷三

龍神いさめの糸竹のしらべ近国他国の見物なん女。くがにはさん敷幕毛氈沖に舟幕舟じるし。磯は吉野の花と成。海は錦の波

くぐる立田川とぞ変じける。

大職冠鎌足公楼船に乗うつり給へば。(中略)

唐船楽船見物船。くがの貴賤一どうにはあと計にめをふさぎ。つみたる縄をくり入く二三百丈くり入しが。ふしぎや縄さき四方に乱れ。あなたへひかれこなたへ引くるりくと引廻し縄にた、かれちる波は一村雨のへごとく也

鎌足御らんじ是は正しく海底にて。悪魚悪龍の追廻すと覚えたり。龍神いさめの管弦を奏し猶々縄をくりおろせと。いらつて下知をなし給へば。小山のごとくたぐりつみたる縄をくりさけくりおろし。楽は平調波がへししんぬもすみてへ覚えける

『大職冠』第三

場面⑤では、『世間狙』一之卷三の道具会に参加した人々も、『大職冠』の見物人たちも宝物の披露を楽しみにしている。また、七郎右衛門も鎌足も宝物を獲得することを期待している。ところが、『世間狙』一之卷三の宝物は曙の茶器であるが、『大職冠』の宝物は面向不背の玉である。

場面⑥

ちと見所あつて申事じやが左様でござりますかといへば。いかにも曙の名器でござると臺所から取寄るは。七重の帕十重の箱

に満座の道具や素人衆も是はとおどろき。もみ手にて。

『世間狙』一之卷三

今やうごくかくと見る所に。はるか沖にくれなるのちしほの波うづまきあがり。玉はしらずあま人は海上にうかみ出たり。すは龍宮より帰りしは繩をたぐつて引よせよと。大ぜいどつとあつまつてゐいやくとたぐりよせ。

程なく舟に引上れば悪龍毒魚のわざと見へて。五体もつゝかすあけに成髪はもくずからまれて。底のみに住虫の息。今をさいと見へければ。

とても取ぬ物故にむぎんの命捨しよと。船中わつとぞさけびける。 (『大職冠』第三)

場面⑥において、『世間狙』一之卷三でも、『大職冠』でもいよいよ宝物が登場するところ、人々が盛り上がっている。だが、『世間狙』一之卷三の宝物は曙の茶器で、『大職冠』の宝物は面向不背の玉である。

場面⑦

七郎右衛門様お目利の名物今一度拝見いたし申たしと懐から嗜みの塩瀬取出すやら。手水遣ひに立やら手に取て見れば見る程めつたにしほらしく見へ。少しのなれといひしまで爰がどうも

宝物不登場という趣向の利用

いはれぬ所と寄こぞりて誉そやすに。 (『世間狙』一之卷三)

鎌足御らんじ。いやと玉は取たるぞ。雑人共近くよつて罰うくるなど。あたりの人をはるかにのけ則風にだきおこさせ。

(中略) おきあがらんともがきしを鎌足をさへてしほらく。命をくれよと云しは此こと。たとへ龍宮に至らず共玉を取たる道理也。出其いはれかたつて聞せん。耳にとめてさとりをひらき成仏せよ。仰面向不背の玉唐の帝に有とはいへ共。箱をひらいて髓に玉を押ししたると云こといづれの書にも見へわたらず。然れば此玉は本仏のさとり甚深秘蜜の一大じ。非口所宜非心所測とて。口にもとかれず心にもはかられず。鏡の内のかげのごとく。有ともなし共手のさ、れぬ。不思議不可得の妙理をさして宝と名付し物ならんと推量せしにたがはずもろこし人のちゑふかく。(中略)

其時鎌足公いにしへ狐の奉り。御名にしおふ利劍の鎌錦の袋より取出し。左鎌にをつ取なをしちの下をかき切給へば。誠に玉のおのこ君かんばせけたかく出生ある。御裾のはしを引ちぎり若君をおしつゝみ。船ばりにつゝ立大音上。面向不背の宝珠龍宮世界三十丈の玉塔にこめたりしを。あま人うはひ乳の下をかき切玉をおしこめ取帰り。ぬしはむなしく成たれ共三国ふ双の宝日本に。とゞまり給ふとよば、り給ふはあたりもひゞく計也。

〔大職冠〕第三

場面⑦では、『世間狙』一之巻三の七郎右衛門も、『大職冠』の鎌足も本当の宝物の欠場に気付くも、その場では本音を言わずに贗の宝物を誉めたてた。七郎右衛門は贗の曙の茶器を誉め、鎌足は生まれればかりの海士の子どもを、面向不背の玉の代わりに三国無双の宝として誉めたてたのである。

場面⑧

老人かさねて。お素人方はともあれ歴々の道具や衆がござるが。いづれもの目利で求めさつしやる衆が大坂中にはあまたござらふが。今夕の躰ではいつかう目の明た衆は一人も見へませぬ。向後は七郎右衛門殿をおたのみ申て道具の素性も見習はつしやるが貴様方の家業といふ物じやと。あくまで悪口せられても一言の返答するものなく。一座しらけて其夜の会ははて。皆面目を失ひかへりけり。〔世間狙〕一之巻三

万戸悦び御舟にやがて乗うつり。善哉／＼日本の大臣の智力の程こそめでたけれ。もと此宝はいつの御代より伝はる共。始もなく終もなくまして七重の箱の中。終に拜せし者もなく微妙無尽の深理なれば。有無の二つをはかりかね龍宮へとられしと申せしに。御身其道理をさつしあまを入れて龍宮より。取かへし

たるとのさどりのちゑたつとふにかぎりなし。いで／＼するしの御箱を渡しまいらせんと。七宝莊嚴の箱を取出す。万里の海山へだ、りし異国のちゑ日本のさとり。わりふを合せしごとく也。〔大職冠〕第三

場面⑧では、『世間狙』一之巻三の老人も、『大職冠』の鎌足も相手を誉めた。ただし、老人に誉められた七郎右衛門は、それが悪口だと分かっているのに一言も言い返すことができない。それに対し、万戸に誉められた鎌足は、喜んで面向不背の玉の箱を受け取る。

場面⑨

是よりも此沙汰が広くなりて京堺にも聞へければ。去、御大家より聞およばれ。其曙の茶器は故ありて先祖より此方の家に所持する所。又／＼此度売物に出たりとは其意を得ず。しかしいづれか真偽とも定めがたければとて大豆屋へ使者をたてられ。目利所をもつて改めさせられしに。並べてはそこばくの違ひにて。御伝来もたしかに極数札の証拠もあれば。大豆屋の茶器は丸薬入にもおとりて見ゆるにぞ。又此うはさが広くなりて。目利が違ひしとて七郎右衛門が異名をもちがひ先生といひはやしぬ。隠居大愚此やうすを聞およばれ大きに腹立し七郎右衛門を呼付。いらざる目利自慢より大分の金銀をつみやすのみか。人

に笑はれて大恥の名をとりし事。もと商人の道をわすれたるよりの事なり。町人は算筆として外の事はきつとたしなみて家業をつとめ。無用の目利いたすべからずと席をうつつてしかりつけ隠居へかえられぬ。七郎右衛門跡を見おくり手鼓の中音にて。

ツィいやしき海士の胎内にやどりてと。諷はれしはいかゝたわけの
〔世間狙〕一之巻三

鎌足しさつて三拝有。(中略) 正真の仏体と礼拝あれば御箱より。金色の光さし十方遍照かくやくと。僧俗男女一どうにあつと礼する其こゑはしばしなりもしづまらず。

此仏力に神力もますく入鹿をほろぼさん。ずいさう吉左右あらうみの底はかりなきちゑのうみ。つくることなき身の内の宝の玉真如の玉。花原磬泗浜石みつのたからに秋つ島。和国をいはふ唐楽のたいこもかねも千秋楽。ふくややつはもちやるめるも万歳。楽をぞしらべける。
〔大職冠〕第三

場面⑨では、『世間狙』一之巻三の道具会が終わった後、七郎右衛門が目利きした曙の茶器が贖物だと分かり、七郎右衛門は人々から「目違い先生」と呼ばれるようになり、父親にも意見された。しかし、『大職冠』の玉取りが終わった後、鎌足が受け取った面向不背の玉の箱から金色の光が出て、人々は皆仏力に感動し、興奮しな

から礼拝して、おめでたく完結した。つまり、道具会と玉取りの結末部分は正反対だと言えよう。

このように、場面⑨において、『世間狙』一之巻三の結末は、『大職冠』の玉取りの結末と逆である。しかし、場面①②の対応関係からみると、『世間狙』一之巻三の道具会に参加した道具屋、老人、七郎右衛門の人物造形は、それぞれ『大職冠』の玉取りに参加した見物人たち、万戸、鎌足に似通っている。

さらに、曙の茶器と面向不背の玉、お金を騙し取ることと唐土に恥をかげずに日本で仏法繁昌させることというような焦点となった宝物と目的の設定の相違を除けば、場面①②の物語の展開では、目的を持って出かけること、様々な宝物が出されていること、最初に二つの宝物を出したこと、見たことのない宝物に対する期待がますます高まる人々、宝物を自分のものにしようとすること、相手の願望に応じたこと、宝物の披露を楽しむにしていること、宝物の獲得を期待していること、宝物の登場によって人々が盛り上がること、本物の宝物の欠場に気付いたが、その場で本音を言わずに贖物の宝物を誉めたこと、相手を誉めたことにおいて、『世間狙』一之巻三の道具会は『大職冠』の玉取りと高い類似性を示している。

二、朝鮮通信使の来日と挿絵の役割

前述したように、人物造形、物語の展開において、『世間狙』一之卷三の道具会と高い類似性を示している『大職冠』の玉取りは唐土と日本に関わっている。どうして『世間狙』一之卷三の中で、七郎右衛門の父親にあたる大豆屋七兵衛の人物像を、「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」と設定したのであるか。ここで意図的に「朝鮮人を三度見た」ことを『世間狙』一之卷三に入れた目的は何だろうか。

森山重雄の『上田秋成初期浮世草子評釈』の評釈によると、大豆屋七兵衛の人物像が「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」と設定されたのは、朝鮮通信使と二度会ったという秋成の体験を踏まえているのである。一方、藤井乙男、原道生、朴麗玉の指摘から、正徳元年（一七一二）十月前後竹本座で上演された『大職冠』と正徳元年朝鮮通信使の来日との深い関わりが読み取れる。さらに、朴麗玉は次のように指摘した。¹⁵⁾

『大職冠』が従来の「大織冠物」と一線を画す設定が、「玉の無い玉取劇」だということは既に述べた。（中略）それを巡って日本と唐の為政者同士の鎌足と万戸の知恵比べ、そして緊張が

描かれている。これは、大坂の淀川に浮かぶ朝鮮通信使を乗せた船とそれを囲む幕府の船によるパレードにも通じるものがある。

上記の指摘に基づけば、『世間狙』一之卷三と高い類似性を示した近松門左衛門の作品『大職冠』は、正徳元年（一七一二）の朝鮮通信使来日と緊密な関連性を持っているということになる。よって、『世間狙』一之卷三の中で、七郎右衛門の父親にあたる大豆屋七兵衛の人物像を、「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」と設定したのは、『世間狙』一之卷三の物語の展開と『大職冠』との関連性を示唆するためと考えられる。さらに、『大職冠』の玉の無い玉取も、鎌足と万戸の知恵比べも、船のパレードも近松門左衛門が新たに考案した特別な場面設定であるため、秋成は『大職冠』のユニークな場面設定に注目し、意図的にそれらの場面をアレンジし、『世間狙』一之卷三に取り入れたのではないだろうか。

そのほか、神楽岡幼子は『世間狙』一之卷三の「此紋はまへかどに海老蔵が来た時見ました。曾我兄弟の紋所かと存ます」という設定、およびその挿絵に描かれた人物の着物に見られる三桁の紋から、『世間狙』一之卷三の挿絵と海老蔵が登場した歌舞伎「八的勢曾我」との関連性を指摘した。¹⁶⁾しかし、図①に示すように、『世間狙』一

之卷三の挿絵には、三枘の紋の着物を着た男のほかに若者一人と僧侶一人も描かれている。これまで『世間狙』一之卷三の挿絵に描かれた若者と僧侶に関する考察が行われていない。

図① 『世間狙』一之卷三の挿絵^①



ここまで検討してきたように、『世間狙』一之卷三の道具会は『大戦冠』の玉取りと高い類似性を示している。図①の場面は、『世間狙』一之卷三の七郎右衛門が刀屋の出した朱鞘を眺める場面に当たる。つまり、

図①の中で、朱鞘を手にした人物が七郎右衛門だと考えられる。一方、『世間狙』一之卷三の七郎右衛門が刀屋の出した朱鞘を分別する場面では、登場人物として七郎右衛門と刀屋しか設定されていない。どうして図

①の画面では、七郎右衛門の左右に若者と僧侶が描かれたのだろうか。

『世間狙』一之卷三と『大戦冠』との対応関係からみると、七郎右衛門の人物造形は鎌足と高い類似性を示している。さらに、奈良博物館が所蔵する図②に挙げた、永正十二年（一五一五）の「藤原鎌足像」を見ると、藤原鎌足の左右に若者と僧侶が座っている。奈良博物館の解説では、次のように図②を説明している。^②

図② 「藤原鎌足像」永正十二年（一五一五）^②



奈良・談山神社の祭神とされる藤原氏の祖・鎌足（六一四～六九）の肖像画。左足を踏み下げ両手で笏を執る鎌足の姿を中央に大きく描き、向かって左下に鎌足の子息である不比等（ふひと）、右下に同じく子息である僧形の定貞（じょうえ）の三人が、上畳上の床座に坐る姿を描く。

よって、図②の鎌足の左右に描かれた若者と僧侶は、鎌足の息子である不比等と定貞である。図①を図②と対照してみれば、二枚の絵の構図も描かれた人物も似通っている。ただし、図②の中で鎌足

が手にした笏は、図①の中で『世間狙』一之卷三の内容設定に従い、朱鞘に変えられた。つまり、『世間狙』一之卷三の挿絵である図①の構図も、『世間狙』一之卷三と藤原鎌足との関連性を暗示していると言えよう。

このように、「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」というような大豆屋七兵衛の人物設定も、『世間狙』一之卷三の挿絵も、『世間狙』一之卷三と近松の作品『大職冠』、藤原鎌足との関連性を示唆している。

まとめ

『世間狙』一之卷三の道具会では、客の金を騙し取ろうとする道

具屋、賈の曙の茶器というような庶民的な要素が、近松門左衛門の作品『大職冠』の玉取りの物語の展開と融合された。そのような融合の中で、『大職冠』の玉取りにおける近松のユニークな創作である玉の無い玉取も、鎌足と万戸の知恵比べも、船のパレードもアレンジされ、『世間狙』一之卷三の道具会部分に入れられたのである。また、『大職冠』の玉取りの成功と反対に、『世間狙』一之卷三の結末の部分では七郎右衛門の失敗が描かれた。そのギャップによつて、目利き自慢の七郎右衛門のおかしみが一層鮮明に描き出されたと考えられる。

さらに、近松の『大職冠』と朝鮮通信使の来日との関連性への考察を通じ、「朝鮮人を三度見たよりは、咄のない男ぞかし」というような大豆屋七兵衛の人物設定は、『世間狙』一之卷三と『大職冠』との関わりを示唆していることが分かった。また、奈良博物館所蔵の永正十二年（一五一五）の「藤原鎌足像」と比較することによつて、『世間狙』一之卷三の挿絵は、『世間狙』一之卷三と藤原鎌足との関連性を暗示していることを明らかにした。

つまり、『世間狙』一之卷三の道具会部分は、近松の『大職冠』の玉取りと緊密に関わっている。また、大豆屋七兵衛の人物造形も『世間狙』一之卷三の挿絵も、『世間狙』一之卷三と近松の作品『大職冠』、藤原鎌足との関連性を暗示しているのである。

注

- ① 『^{『新編』}大阪出版書籍目録』(大阪圖書出版業組合、昭和十一年五月二十五日、p. 65)。
- ② 『^{『新編』}諸道聴耳世間狙』(上田秋成全集)第七卷、中央公論社、平成二年八月二十五日)。底本(国立公文書館(内閣文庫)蔵、大坂心齋橋筋しほ町正本屋清兵衛板、明和三年正月吉日)。
- ③ 浅野三平「諸道聴耳世間猿論」(『女子大國文』第十五号、京都女子大学国文学会、昭和三十四年十月二十五日、p. 50)。
- ④ 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」(国書刊行会、昭和五十二年四月三十日、p. 59)。
- ⑤ 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」(国書刊行会、昭和五十二年四月三十日、p. 59)。
- ⑥ 野澤真樹「はなし」としての『諸道聴耳世間狙』(『国語国文』第八十六卷第十二号、京都大学文学部国語学国文学研究室、平成二十九年十二月、p. 38-40)。
- ⑦ 神楽岡幼子「『諸道聴耳世間狙』の挿絵」(『国文学』第七十号、関西大学国文学会、平成五年十二月二十日、p. 31-32)。
- ⑧ 神楽岡幼子「『諸道聴耳世間狙』と歌舞伎」(『演劇研究会会報』第二十五号、演劇研究会、平成十一年六月十日、p. 18)。
- ⑨ 宮本祐規子「上田秋成『諸道聴耳世間狙』と歌舞伎——團十郎を中心に——」(『日本文学』第六十二卷第四号、日本文学協会、平成二十五年四月、p. 48-49)。
- ⑩ 謡曲「海土」(新日本古典文学大系57『謡曲百番』、岩波書店、平成十年三月二十七日、p. 573-580)。
- ⑪ 謡曲「海土」の素材・主題(新日本古典文学大系57『謡曲百番』、岩波書店、平成十年三月二十七日、p. 573)。
- ⑫ 川口節子「玉取り劇の一側面——並木宗輔「藤原秀郷依系図」の場合——」(『日本演劇学会紀要』第三十三号、日本演劇学会、平成七年五月十日、p. 4-5)。
- ⑬ 朴麗玉「近松の作品と朝鮮通信使——『大職冠』の場合——」(『国語国文』第八十卷第三号、京都大学文学部国語学国文学研究室、平成二十三年三月、p. 36)。
- ⑭ 『大職冠』(近松全集 第七卷)、岩波書店、昭和六十二年十一月二十日)。底本(東京都立中央図書館諸橋文庫(七六八・M・W・七)、大坂山本九兵衛・九右衛門版)。
- ⑮ 森山重雄「上田秋成初期浮世草子評釈」(国書刊行会、昭和五十二年四月三十日、p. 62)。
- ⑯ 神楽岡幼子「『諸道聴耳世間狙』の挿絵」(『国文学』第七十号、関西大学国文学会、平成五年十二月二十日、p. 31-32)。
- ⑰ 藤井乙男「大職冠」の解説(『近松全集』九卷、朝日新聞社、昭和二年八月)。
- ⑱ 原道生「大職冠」ノート——近松以前——(『近松論集』第六集、近松の会、昭和四十七年三月)。
- ⑲ 原道生「大職冠」ノート追録(新日本古典文学大系『近松浄瑠璃集』上)、岩波書店、平成五年九月)。
- ⑳ 朴麗玉「近松の作品と朝鮮通信使——『大職冠』の場合——」(『国語国文』第八十卷第三号、京都大学文学部国語学国文学研究室、平成二十三年三月)。
- ㉑ 前掲注⑩に同じ。
- ㉒ 前掲注⑬に同じ。
- ㉓ 『諸道聴耳世間狙』一之卷二の挿絵(『上田秋成全集』第七卷、中央公論社、平成二年八月二十五日、p. 34-35)。底本(国立公文書館

宝物不登場という趣向の利用

一〇八

(内閣文庫) 蔵、大坂心齋橋筋しほ町正本屋清兵衛板、明和三年正月吉日)。

⑱ 「藤原鎌足像」 永正十二年 (奈良博物館蔵) <https://www.narahaku.go.jp/collection/6830.html>

⑲ 『神仏習合——特別展…かみとほとけが織りなす信仰と美——』 (奈良国立博物館編集、平成十九年、p. 297) <https://www.narahaku.go.jp/collection/6830.html>

〔付記〕 引用に際し、ルビは省略した。引用文中の傍線はすべて引用者による。資料の掲載のご許可をいただいた奈良国立博物館に対し、深謝いたします。

なお、本稿は2022年武漢大学本科教育質量建設総合改革項目の助成を受けたものである。